
竜堂奈々 ~ 退魔幽遠記 ~

黒企画

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜堂奈々〜退魔幽遠記〜

【コード】

N0980Q

【作者名】

黒企画

【あらすじ】

竜堂奈々16歳。水の力を操る能力を持った少女。

この年齢にして、竜堂家の代々受け継ぐ「退魔」という仕事を受け持つことになったが、同時に少女らしい自由も得ることになる。

新しい表と裏の生活。広がる世界と交友。

これから彼女に待ち受ける事件と運命とは？

オリジナル作品ですが、どこかで見知った名称や名前が出てくることもあります。10年以上前に書いた作品を編集しつつ、ここで続きを書いていく感じなのでプロットとかはないグダグダ進行とな

るでしょうが、お付き合い頂ければ幸いです。
また、本作は『題名の無い本編』の『外伝』となります。

00 プロローグ（前書き）

本作品はフィクションです。

登場する人物・団体・国家・企業・名称・宗教などは全て架空の設定であり、現実との関係はございません。

オリジナル作品ですが、どこかで見知った名称や名前が出てくることもあります。10年以上前に書いた作品を編集しつつ、ここで続きを書いていく感じなので、プロットとかはないグダグダ進行となるでしょうが、お付き合い頂ければ幸いです。

また、本作は『外伝』となります。

00 プロローグ

竜堂奈々16歳 〈退魔幽遠記〉

〈プロローグ〉

リテイル。

その名は地球という名の惑星に始めて建国された統一国家の名前だ。

西暦も2100年を越えようとしたある日、世界規模の大地震が起こった。

その災害規模はすさまじく、地球人類の70%以上を減らす程の大惨事であった。

またその地震が原因となり、大陸の形が大きく姿を変えた。殆ど1つの大陸になってしまったのだ。

復興は困難を極めた。復興するにも人手が足りない。大陸移動による気候の変化で食料の確保も難しくなった。意思疎通も言語の違いという壁によって上手くいかず、更に大陸が統一されたことによって異民族間の争いも絶えないようになっていた。

そうやって荒廃した世界は更に荒んでいった。

結局、その状態が100年以上も続いた結果、更に15億近くの人間が減ってしまった。地球上に暮らしていた60億以上いた人間が、たった5億人程になってしまったのである。

次第に人々は自らの存亡の危機を感じたのか、はたまた争いに疲れたのか、復興と再生に向けた活動が本格的に始まった。そうしてようやく人類が元の暮らしを取り戻しかけた頃には元の国などの事は忘れてしまっていた。

言葉も今までの言葉から新しく世界共用語が作られた。

大震災からおよそ200年程が過ぎた時、かつて東京と呼ばれていたであろう大地を中心に大都市が形成されていた。そしてそこを中心に「リテイル」という国家が生まれたのである。

厄災を経て、ようやく人類がひとつになったのであった。

そうして更に幾許かの時を経て…そんな大地震の記憶も遠い過去のものになったころ。

人々は平穩に暮らせる日常が当たり前になった。

そんなリテイルから話は始まる。

誰もがあの壮絶な戦いが始まるとは夢にも思っていなかった、まだ影が身を潜めていた頃の話。

別の影と戦う者がいた。

それが竜堂奈々、当時16歳のまだ何も知らない少女だった。

00 プロローグ（後書き）

初投稿となります。

誤字・脱字等ありましたら、ご指摘いただければ幸いです。

01 序章（前書き）

本作品はフィクションです。

登場する人物・団体・国家・企業・名称・宗教などは全て架空の設定であり、現実との関係はございません。

01 序章

リテール第一都フランベルジュ特区。そこは特別区と称されるように住んでいる人間も特別だ。

財界人や芸能人、有名アーティストや有名スポーツマン、また政治家や大企業の社長など、いわゆるVIPクラスの人間が集まって暮らしている。

それ故にフランベルジュ特別警察なんていう普通の警察機構とは独自の機構なども存在している。

特別区、とは後からつけられた名前だ。たまたま都心から近く、穏やかな緑の残る田園風景、海が比較的近いなんていうリッチな条件が揃っていて、交通の便も良いなんていうところにVIPクラスの間人間がこぞって住み着いただけだった。後になって誰かが特別区と呼び始めて今では「フランベルジュ特区」の名が浸透している。

特別警察はある企業の社長が自らの私邸を守る為に結成したのだが、程なくしてその会社が倒産。残った警察機構を区長が区民の募金を基に買取、今の形に仕立て上げた。今では区民税の中にその維持費も含まれている。当然他の区より金額が高いのはいうまでも無い。

そのフランベルジュ特区に「ヴァルキュリアス女子学校」がある。幼稚園から大学まで一貫教育が受けられる名門中の名門校である。敷地は広大で迷子になったら出てくる事が困難なほどの広さがあった。設備は常に最新のものが用意され、環境も常に新鮮に保たれている。維持費は相当なものだが、そこは莫大な援助金が経営を支えていた。

この援助金の額が自らの地位を示すかのようにやっきになって高額を収めるものもある。

当然それを鼻にかけたりする生徒もあらわれたりもしていたけど。

そんな名門中の名門校の高等部に竜堂奈々は所属していた。

その日は穏やかな陽気に包まれていた。春のような陽気が穏やかに変わらない日常を実感させる。

実際には季節は夏から秋に差し掛かっていた。

落ち葉がひらひらと窓の外を舞っていく。

落ち葉が散っていく様を眺めていた奈々だったが、現実に戻ったのか再び机の上にあるノートに取り掛かり始めた。

それは今先程の授業で与えられた課題、いわゆる宿題であった。

奈々はそれを15分という短い休み時間の間に消化しようとしていた。とはいっても簡単に消化できてしまうようなものでもなかった。大抵はお昼休みに終わらせる事が多かった。

普通校ならよほどのガリ勉が変わった人扱いされる所だが、この学校ではそうでもないようだった。

何せお嬢様学校だけあって、学校が終わってもお稽古や財界人達とのパーティーの予定などで放課後に満足な時間がない生徒が数多くいた。その為に宿題などは学校にいる間に最低でも半分以上は消化しておかねばならなかった。

「…なんとか終わりそうね」

今日は意外と宿題のボリュームが少なかった為、この15分で力タが尽きそうであった。これが終われば今日のノルマはもうない。

次の授業は宿題を出さない主義の先生だったし、午後は体育系の授業なので宿題があるはずもない。

キーンコーンコーンコーン と鐘が鳴る。

「ふう、間に合ったわね」

思わずため息をつく。そしてすぐ次の授業の用意をする。予習もしてきているので憂いは無い。

奈々は優等生であり、秀才だった。

高等部で考えてもベスト10には入る。といってもある時は3位、ある時は10位と成績にバラツキがあるのだが。それを除けば成績自体はTOPクラス、品行方正とくれば教師からのウケもよかった。

奈々は高校一年生であるが、後輩からの人気が高く、現在もたまたま中等部からの訪問者がやってきたりする。そして何故か先輩からはウケが悪い。陰湿ないじめらしきものがあつたりもしたがサラリとかわしてしまったので徐々になくなっていった。かといつても仲がよくなることは今のところないようだった。

クラスメイト達と放課後に一緒になって遊んだり、出かけたり、ということとは殆どなかったが友好関係は広がった。

若干、友情の他に愛情を感じるものが多いので奈々にとっては微妙な悩みの種でもある。

とにかくこの「ヴァルキュリアス女子学校 高等部」では奈々は至って普通のお嬢様と変わらない生活を送っていた。

しかし、奈々の私生活は他のお嬢様達とはだいぶ異なるものだった。

竜堂奈々の暮らしている竜堂家は、代々受け継がれてきた由緒正しき家系であり、大震災前から生き残っている数少ない家系のひとつであった。現在も大震災前からの厳格な家風を続けている。

竜堂家は竜堂組と呼ばれる、俗っぽい言葉で言えば「ヤクザ」であった。

とはいっても暴力行為などは奈々の父であり、組長の竜堂翼嚴重に禁止されていた。その対象は一般人に限り、ということである。同業者には遠慮はない。

しかし、この時代に「組」なんていうものをもっているのはもう数えるほどしかない。まともに機能している組となれば片手で数えるほどである。その中で竜堂組は最大手といっても過言ではない。財界や政界への影響力も強い。フランクフルト特区にいるのは当たり前の実力・権力であった。

当然、奈々の同級生などはその事は知っている。口の悪いものは「ヤクザ娘」、「極道娘」等とも呼ぶ人間もいた。本人は気にもしていないが。

奈々が他のお嬢様方と違う点は家柄だけではなかった。

放課後の鍛錬というものがある。合気道の習い事、なんていう生易しいものではない。

合気道、空手、柔道など、武芸全般は一通り教え込まれる。そして気の勉強。滝に打たれるなど、前時代的な修行もある。更にはしなやかな身のこなしを身に付けるために舞を踊る事もある。

痴漢や強盗相手には過ぎるような戦闘方法の教育。それが幼い頃から毎日続けられている。一日も早い技能の取得が必要であったからだ。

竜堂組の戦力としてではない。他の理由があった。ある二つの理由から。

一つはのちのち語られる事になる。

そしてもう一つはこれから語られる物語…。

01 序章（後書き）

誤字・脱字等ありましたら、ご指摘いただければ幸いです。

またお時間やお手間などがございましたら、ご感想などをいただくと私が喜びます。

02 退魔の継承（前書き）

本作品はフィクションです。

登場する人物・団体・国家・企業・名称・宗教などは全て架空の設定であり、現実との関係はございません。

02 退魔の継承

竜堂奈々、彼女の朝は早い。

目が覚めると真つ先に朝の行水を行う。その日課は冬であるごと夏であるごと変わらない。裏庭でいつものように行水を済ます。

今の時代、井戸なんていうものが残っているのも、歴史資料館がここくらいのものである。

地下水をくみ上げて使用しているところは多々あるが、ポンプでくみ上げて個々で使用しているのが主である。わざわざ桶にロープをくくりつけて水を汲み上げている本物の井戸なんて面倒なものは普及する訳がなかった。

大地震前の前時代でもそんなものはごく僅かしかなかったというのに。

竜堂家の当主である竜堂翼は古い純和風が好きだった。

竜堂家は代々、日本という国でその生を受けている事と関係しているのか。

とにかく家は今時お目にかかれない木造住宅。庭園などもあり、何度かTVなどから取材を受けているほど今では貴重なものだった。現在は国が重要文化財の指定をするかどうかの審議中である。

行水を済ませた後、奈々は着替えて道場に向かう。

そこで30分の瞑想。その後、軽く身体を動かす。

身体を動かすといっても、ある時は空手の型だったり、柔道の受身であったりと色々こなす。

1時間ほどで一通り終わるとシャワーを浴びる。

奈々の父である翼は「必要ない」と、そのまま朝食へ向かってしまいが、この辺りはやはり年頃の女の子といったところだろう。

シャワーからでると朝食。

今までパン食などは一度もなく、白米と味噌汁がメインとなり、日によって焼き魚や目玉焼きなどのおかずが用意されている。

朝食後、新聞やTVをしばらく眺める。情報収集も怠らないように、と父の教えでもある。

それらを全て終えて。ようやく登校するのである。

家にやってくる（または住み込んでいる）組員たちやお手伝いさんに挨拶を交わしながらゆっくりと家をでる。

同年代のお嬢様と比べてもかなり異質な生活であった。

珍しく出かける姿を父が見送る。

「奈々、今日は大事な話がある。」

それだけ簡潔に伝えると奥に引っ込んでしまった。返事を伝える間もない。

だが翼が大事な話と前置きを付けるということは相当大事な話である事は考えるまでもなく判ることであった。

翼は返事を聞くまでもなく立ち去り、奈々は返すまでもなかった。今までだつて一度も学校から帰宅までどこにも寄つたことはないし、帰宅時間も学校の時間割や行事で左右される部分があるものの、1分たりとも予定より帰宅が遅れたことはなかったからだ。

それでもわざわざ「大事な話がある」と言ってきたのは予想外の出来事にも気をつけろ、という意味合いである。

つまりは「何があっても帰って来い」ということである。

奈々はその大事な用件について心当たりがなかったが、特に気負いもせずそのまま学校に向かった。

学校まではそれ程遠くない。歩いて10分程度。さらに家をでる時は学校に20分以上は早く着くように出ている。これも昔から変わらない習慣であった。

とはいってもお嬢様学校の朝は早い。20分前に着いても既に相当数の生徒が登校してきていた。

部活関係で朝練のあるもの、予習を行うもの、生徒会活動の一環、など理由は様々だ。家柄が家柄なので皆規則正しい生活をしているようだった。

予鈴まで奈々も予習をする。別に取り立ててしなくても問題は無いのだが他にやることもない。

仲の良い友達…はまだ登校していない。

残念ながら奈々は友達運には恵まれていないようだった。

家柄が異質なせいと放課後の遊びにあまり付き合えないことから敬遠されがちだった。それでいて成績はトップクラスなものだから余計に近付き難い状況であったのかもしれない。

予鈴1分前。

時計をみて、参考書などをしまう。

予習自体は途中だったが先生が到着するまでガリ勉のように勉強するのもあまり好きではなかった。

予鈴が鳴った。

と同時に飛び込んでくる一人の生徒。

「間に合ったあ〜」

と、一人大きくつぶやくと急いで席に座る。

その様子を他の生徒は邪魔そうな目つきでみる。当の本人は全く気にした様子はない。

乱暴にかばんをおくと奈々の隣の席に座る。

「おはよう」

周りの視線がまだ痛いほど注がれているのだが、当人はどこ吹く風といった感じで奈々に挨拶をする。

「ええ、おはよう。今日もギリギリなのね」

と、奈々も気にした様子もなく返す。

「まあ遅刻しなだけ良いと思ってよね」

この気さくに話し掛けてくる女生徒こそ奈々の唯一の友達でもある。

名前はセフィアニア・ブランシュマイル。通称はセフィ。

セフィはこの学校では、言ってみれば「落ちこぼれ」の部類に入る。

学力はあまりなく、運動神経もそこそこ。遅刻は多く、授業中にも寝てしまうなど何かと教員に目をつけられている。

唯一、秀でているとすれば機械・情報関係技術。コンピューターなどの扱いに長け、いくつかの賞をもらったり大会で優勝するほどである。ハッキングなどの非合法的な技術も習得しており、そのせいか変な情報通でもある。

頭の回転はいいのだが興味の無いことにはまったく向かない、とは本人の言である。

セフィの家、ブランシユマイル家はブランシユマイル商会という総合商社を行っている。スピードワゴン社、ジオルノジョバーナ社に続く第三位の会社だ。上位の二社ほど目立っていないものの確実にその勢力範囲などをのばしている堅実な会社としても有名である。セフィの両親はそれゆえ忙しく、家にいることが少ない為、セフィは放任されて育った。

「自分で学べ」とは後からつけた理由なのかもともの主義なのかは知らないがそんな言葉を常に言い聞かせていた。だから家庭教師やマナーなどを教える者もつけず、食事と洗濯・掃除くらいの最低限のお手伝いだけを雇った。その代わりに、学習に必要なもので欲しいというものは大抵簡単に買い与えた。辞典やマニュアル、知恵の輪からパソコンまでなんでも。

セフィは最初、本などに興味を示していたが、小学部にあがる頃にはパソコンがお気に入りになってしまった。

そこからマニュアルなどをねだって瞬く間に関連技術を習得していった。奈々と出会った頃には立派なネットワークの住人になっていたのであった。

そのため夜更かしが生活の基本となり、遅刻が多くなる。しかしそれを叱る人間もいないので、今のような態度になってしまったのである。

「セフィ、もう先生から目をつけられていたわよ」

「あらら、もうっ？」

と、セフィはとぼけてみせる。

「当たり前でしょ、まだ一年生とはいえってもこれだけ遅刻ギリギリや遅刻が続けば目もつけるわよ」

「アハハハ、まあ中等部もこの調子で卒業できたんだし、なんとかなるでしょ」

と明るく言う。

「はあ…ほんと楽観的なんだから…」

ため息をつく奈々。

奈々とセフィとの付き合いは小学部の3年の頃からである。クラス編成の際に一緒になった事が付き合いの始まりだった。それ以来、腐れ縁とでもいうのかずっと同じクラスだ。中等部に入ったときも高等部でもまさかの同クラスには二人して笑いあったものだった。

「で、まだいつものやってるの?」

お決まりのようにセフィがたずねる。

「ええ、そうよ。日課ですもの」

セフィは奈々の朝の一連の修行僧のような生活ぶりについて尋ねていたのだった。

彼女は奈々の生活の詳細を知る唯一の友達であった。

「大変だねえ、私なんて絶対真似できないわね」

「やってみると意外とそうでもないのよ?」

とサラリという奈々。

「あははは、遠慮しておきますよつと。私には絶対無理無理」
セフィはそれは勘弁、という顔をしながら笑っていた。

「それもそうね」

「無理とはいったけど、そんな簡単に肯定されると私のプライド
傷ついちゃうな。」

「フフフ、セフィは他で誇れるものがあるんだからいいじゃない」
「そういつてくれるのは奈々だけね」

そういつて二人で笑いあう。

そこへ丁度担任の先生が入ってきた。

「退屈な授業の始まりか…」

とため息をつくセフィ。ゆっくりと授業の支度を始める。
奈々も黒板に向き直ると筆記用具を取り出す。

いつも通りの平和な授業の始まりだった。

夕方。

全ての授業が終わると同時に奈々は帰り支度を始める。
基本的に部活動を行っている生徒はここでは少ない。
お嬢様ゆえに習い事などで忙しい、というのが理由にあげられる。
奈々も表向きはそういつた理由だ。

「お、今日はいつもよりはやいね？なんかあるの？」

セフィが奈々の慌ただしさに気が付く。とはいっても傍から見

せわしなくしてる様子はない。

長く奈々を見ているものしかわからないほどの差だ。

「ええ、お父様が大切なお話があるというので」

「そっか。それじゃ、また明日ね」

セフィもそれ以上は追求しない。

話す時に話してくれれば良い、というのはセフィの持論である。

詮索するのは話に裏が見えるときだけだった。

色々と言有りの奈々にとってこれほど恵まれた友達はいない。

「ええ、また明日」

そういつとすぐ学校を出る。いつもより少し早めの歩調で家へと急ぐ。

「さて、と」

誰にいつでももなくそういつて更に歩調を速める。今度は明らかに早足とわかる歩調。それでも今までの歩きと変わらない整然さは残っている。無駄のない軽やかな動き。みているものが思わず見惚れてしまう、そんな美しさがあった。

家まではいつもより5分ほど早く着いた。この歩みでこの短縮なら上々だろう。

家に着くなり「ただいま」と一言いうと、道場へと向かう。

父が話がある、というときは決まって道場だからだ。

急いで道場に向かう。その間に心を静める。

道場に入る際には心を静める、というのが父の教えだからだ。

「父上、奈々参りました」

奈々が道場に入ると既に翼は道場の真中で正座して瞑想をしていた。

本来なら声を掛けてはならないのだが、急ぎの話があるのなら声を掛ける必要があった。

「奈々か。ふむ、定刻通りだな」

時計を見るわけでもなく翼はそういった。ただ外をみて日の傾きで判断しただけだった。

しかし翼の日時計は的確で、それでわからないのは秒くらいなものだと竜堂家に仕えるものはそう伝えている。

「父上、お話とは？」

奈々が早速本題を切り出す。

「そうだったな。今日から奈々、お前が竜堂家のもう一つの仕事である退魔の仕事に入ってもらおう。」

翼はなんの脈絡もなくそういった。

「え!？」

思わず驚く奈々。

「退魔は本来成人を迎えてからの仕事ではなかったのですか？」

竜堂家の退魔、それは俗に言う『悪霊退治』とかそういつた代物である。

人に仇なす人外の者を退ける、それが竜堂家代々の本来の仕事だった。しかしそれを出来るのは世継ぎが18才を迎え、成人の儀を終えてからの話だ。17才から退魔を知る為に何度か同行をすることを許される例もあるが、16才の奈々に退魔の仕事をしろというのは例外中の例外だった。

「ふむ、確かに年齢ではまだ退魔には厳しいものがある。しかしお前にはそれを補って余りある能力がある。

それにお前は来る『戦い』に参与しているのではないか？私はそう考えている。今からの実戦でも遅いくらいだな」

能力とは水の力。

それは竜堂家の直系の血筋のみ継承される水を操る力である。時に水を刃に変え、時に水を竜に変え、時に大津波を起こす事さえ出来るといわれている。超能力という範疇を越えた、いわば魔法といっても過言ではない。

水の力は端的に「能力」と呼ばれ、その力を一子相伝として世に残しているのである。

その力をもって退魔を行うのである。退魔はその能力が完全に扱えるようになる年齢、つまり18才もって行えるようになる。精神的にも安定し、能力も完全に扱えるようになるからだ。

それを16歳である奈々に委ねるのだ。

しかし翼がそう言い出すのも無理もない理由の一つがある。

奈々は竜堂家始まって以来の天才と称されている。

普通、10歳前後ではまだ力を操る事すらできず、基礎体力を養ったり武術を教わる頃合なのだが奈々は違った。

力の使い方をわずか8歳でマスターしてしまったのだ。逆にそれを使いこなす体力が追いつかず基礎体力の修行に難航を示した程であった。

幼少の頃に大怪我をして入院中の病院から忽然と姿を消し、三日後に戻ってきたという事件があつて以来、飛躍的にその能力を開花させた奈々。その3日間に何があつたのかは当の奈々ですらわからない。ただ何かが起こつた事だけは間違いないのだが。

とにかく能力だけを見れば奈々は比類なき天才なのは間違いなかった。

そしてもう一つの理由。

『来るべき戦い』である。

これは伝承としては信憑性が薄く、文章としても殆ど残っていないある戦いの事だ。

その戦いで竜堂家は『守るものを守るもの』として闘う事が決定しているという。詳細は定かではない。

しかし翼は己の勘と奈々の力を考えると、奈々が『守るものを守るもの』ではないかと考えずにいられなかった。もし仮定が本当であるとするならば今からの実戦経験というのは当然のことでもある。いつ来るかわからない戦い。場合によっては明日かもしれないのだ。それに備えておくには悪い事ではない。

そう考えた結果である。

「父上がそう考えていらっしやるのなら私はそれに従います」

「いや、今回ばかりは拒否しても構わん。これは私の推測でしか

ないからな」

そういつて奈々を見据える。

暫く考えていた奈々であったが

「いえ、やらせていただきます。」

と、答えた。その目に迷いはない。

「わかった。では今後退魔の仕事に就いてもらう。また日々の修練は義務付けない。一人の退魔士として独自の判断で行うがいい。」

これは翼が奈々を一人の同列の人間として認めたことを意味する。そもそも翼もこれ以上の修練は勘を鈍らせるのではないか？と思索していたところであった。

あとは実戦で学んでいけばよい、と。

「わかりました」

はつきりとした口調でそれに答える奈々。

「これで義務から開放されたわけだ…。奈々、たまには友達とも遊ぶ事してみなさい。新たな発見もあるだろう」

「え!?!」

翼はそれだけいって道場から出て行ってしまった。

父の意外な言葉に驚きを禁じえない奈々であったが純粹に嬉しいというのもあった。やっと人並みに女子高校生の遊びというものを

覚えられるのである。全く興味がないような振りをしていたもの、それでも気になるものは気になった。

楽しそうに話している他の生徒を見ると羨ましくさえ思えたのだ。恐らく定刻の門限の範囲での帰宅なら問題ないだろう。

そう思うと胸が弾む。

と、同時に退魔と言う仕事に不安を覚える。

ただ一度だけ見た退魔。

あれはたまたま家族で出かけていたときに遭遇したものであった。はつきりとした恐怖が未だに心に残っている。

しかし今は何も出来ない子供ではない。能力もある、そしてそれを扱うだけの知性と体力も備わった。

あとはやってみるだけである。

「よしっ」

そう一人気合を入れると決意を持った足取りで道場を後にした。

02 退魔の継承（後書き）

誤字・脱字等ありましたら、ご指摘いただければ幸いです。

またお時間やお手間などがございましたら、ご感想などをいただくと私が喜びます。

03 悲しみを背負うという事(前書き)

本作品はフィクションです。

登場する人物・団体・国家・企業・名称・宗教などは全て架空の設定であり、現実との関係はございません。

03 悲しみを背負うという事

夜、それが魔の者達の領域。暗がりにも身を隠し、それぞれが本能のままに蠢く。

時に人を惑わし、時に人襲い、時に人を死に至らしめる。それが「魔」と呼ばれるもの。

「魔」とは端的に言ってしまうえば、幽霊とか妖怪の類だ。悪霊には消滅を、縛霊には安息を。

退魔とはいわゆる陰陽士の仕事と同じと考えていいのかもしれない。

竜堂家は代々、この仕事を請け負ってきた。

その水の力をもって。

その流れは穢れを浄化し、時に激流となって魔を滅する。その力は陰陽士などとは比べ物にならない。

また陰陽士は物理的な抵抗力に乏しいため、戦闘となると勝手が違う。要は陰陽士や霊能力者等では太刀打ち出来ない凶悪な霊の類をその力で退けてきたのだった。

普通、凶悪な霊などとなると大抵は放置されてしまう。一般人には手におえる筈もないからだ。しかしそのままにしておいては支障がでる、というのは大抵そうだった事件の一番の被害者は土地や物件の所有者となるからだ。折角の土地や物件を意味もなく遊ばせて置く訳にもいかない。

そこで竜堂家の出番なのである。

元々家柄が良かったせいもあってか、特にお金に執着の無かった竜堂家は、仕事の内容を比較して考えればかなりの破格で依頼を請

け負った。故にわざわざ曰く付の土地を格安で買い取って、退魔をして貰ってから高く売るといふような輩までいた。

それを快くは思わなかった童堂家はある程度、金額に条件をつけるようになった。

そうなると顧客は不動産系か役所・国、または金持ちとなっていく。

そうこうするうちに自然とコネというかパイプのようなものが作られ、定められたわけでもなく、いつしか政府ご用達の退魔士となってしまうのだ。

とは、いつても今の機械化が進むこのご時世。凶悪な霊だの妖怪だのがそうそう頻繁に出るわけもない。

まして世界大震災の後、大地が大きく変動し、地脈の変化もあってか土地霊というものが極端に減った。

人口の激減で土地は大きく余っているので多少の土地を放置したところで痛くも痒くもない。土地はまだ広大に残っている。

統一政府となつてからは国境という縛りもないので上層部も次の開発、次の開発へと頭を悩ませているばかりだ。

事実、翼の代になつてからは暇が多くなつた。

政府の依頼は年に数回あるかないか程度しかない。

現在は民間の依頼を主にこなしているのが現状である。民間といつても依頼主は企業や地方自治体などが多かった。

稀に発生する一般家庭等からの依頼にはほぼ無償で対応している。

そのおかげといつては変なのだが、翼は余つた時間を全て奈々の訓練につき込んだ。

生まれ持った才能か、はたまた失踪中に何かあったのかは知らないが、とにかくその甲斐あつて奈々は歴代をも上回る力をもつた水の使い手となつた訳である。

その奈々は今、夜の町を歩いている。横には父である翼の姿もあった。

単に親子揃って歩いている…のだが、その体から発せられる並々ならぬ気に、ただの散歩ではないことは、何の力も持たない人間であつても肌で感じ取れる程のものだった。

親子は「退魔」に向かう途中だった。

奈々にとっては初陣となる。

本来、翼はついてくる必要はないのだが、今回の依頼を責任持つて受けたのは翼である為、彼がしっかりとその依頼の完遂を見届けなくては気が済まなかった。

またいくら奈々がしっかりしているとはいえ、まだ子供。万が一ということもある。そして初めての仕事で勝手がわからぬのは可哀想、というのも少しあった。

そういつた理由から翼も今回だけは同行することに決めた。

今回の依頼主はステア区の区役所からである。

ステア区とはリTAILの首都の中枢が集まる都市。それだけに開発も活発化しており、企業が新しく出来ては潰れるの毎日である。そんな潰れた中の企業の一つが保有していた空きビルがどうやら曰く付のものだったらしいのだ。元の持ち主も既に亡くなっていて、宙ぶらりんの所有権を区が強制的に買わされた形となった。格安なのはいいが、使えないのでは意味がないと予算をなんとかかき集め、今回の竜堂家への依頼と相成った。

話によれば、当初は会社設立に際して幹部陣がかなりのあくどい方法で資金を回収していたらしく、借金の取り立ては元より、不正

な手段で借金を負わせたり、架空の借金をでっちあげるなどしていたらしい。被害者数は数百人ほどだが金額はかなりの額に上った。

当然、支払能力の無い人間は死ぬまで絞られるか、自ら死ぬかの選択しかなく、多くの人間が自殺を選んだ。その結果、怨念が固まりとなり、更には他の霊も巻き込んで膨れ上がり、ある日突然、このビルは幽霊ビルと成り果ててしまった。

それと同時期に、この会社は潰れた。

悪霊が不幸を呼び込んだのか、元々秘密保持が完璧でなかったのか、警察に会社の不正行為がどこからともなく全て暴露されてしまい、経営陣は総逮捕。下の人間は幽霊ビルに残ってまで会社を存続させたか無いと、会社を解体させてしまった。

それからいくつかの会社が転々と入ってきたものの一ヶ月もたず、悪霊が住むと噂が広まってしまい、いまや誰も入ることの無い廃墟と化している。

内部は荒らされ放題らしく、人が立ち入れば容赦なく重量物を投げつけてくるという話だ。

本来、実体の存在しない霊が、物理的に人や物に干渉するのはかなり難しい。それだけでもかなりの力を持った霊であることは容易にわかる。

しかし一つの霊ではなく霊の集合体の繋がりはそのほど強くないので翼にとってはそれほどたいした仕事でもない。翼が危惧しているとするれば、ここ最近、そういった恨みを持った霊が今までは考えられないスピードで力の強い悪霊へと変化している事実だ。

何かが起こっている、そう考えてはいるものの原因がイマイチ特定できずにいる。

また前時代ならともかくこれほどまでに地殻が大きく変わってしまったっている今、霊的にどのような変化があるのかは見当もつかない。

「ここだ」

翼が足を止めた場所。

その目の前にそのビルはあった。

ビルから寒気がするような靈気を放っているのがよくわかる。

首都の歓楽街から10分程度の距離しか離れていなかったが、何故かここは閑散としていた。発せられる靈気が自然と人を遠ざけているのだろう。こういう場所にはチンピラなどのガラの悪い連中が集まっていたりするものだが、噂と人間の無意識の危機感知のせいか人は見当たらない。

竜堂の名を持つものにとってはこれは好都合でもある。

その能力は異端。

どこの世界でも異端な能力は忌み嫌われる。

多少名が売れているとはいえ、やはりこの能力を直接大勢に見られるのは避けたい。

竜堂家は影で生きるのが定め。

誰が決めたわけでもないのだが、そういった暗黙の掟が出来ている。

「私の初めての退魔…」

誰に言っわけでもなくそうつぶやく奈々。

「そうだ。ここから先はお前一人でいけ。そして役目を果たして来い。私はここで待っている。」

「わかりました。」

奈々は翼に見送られながらゆっくりと問題のビルへと歩みを進め

る。

ビルの入り口直前で一度歩みを止める奈々。そしてビルを眺める。悪しき気が漂っているのを肌で感じる。

「はあ…スー。はあ…スー。」

呼吸を整える奈々。

怖さはない。

恐れは無い。

しかし、初めての退魔と言うことで緊張はしていた。

例え失敗しても今回であれば父もいる。しかしなるべくであれば失敗はしたくない。

失敗して恥をかくのは自分だけならまだしも、代々の名が、そして父の名が笑われることになるのだから。

「いくわよ。」

自らを勇気付けるようにそういつと奈々は扉を開け、ビルの中へと入っていった。

ここから奈々の初めての退魔が始まった。

ヒュー！！

ビルの中に入るなり風を切る音が聞こえた。とっさに身をかわす奈々。

その瞬間。

ドガアア！！

先程までいた場所に大きな机が直撃していた。同時に入ってきた扉が塞がれた。

- 入り口を閉じられてしまったわね… -

まさか、侵入した瞬間に仕掛けられるとは思ってもしなかった。それでもかわせたのは日々の修行のおかげであった。考えるより先に体が動いていたのである。

とりあえずこの程度の障害物を破壊するのに訳はないが、敵の正体を見極めるのが先と判断した奈々は、そのまま奥へと向かう。気配がゆらめく。

ヒュン！！ヒュン！！

続けざまに机やら椅子やらが飛んでくる。飛来してくる方向は一定ではない。それを苦も無くさつとかわす奈々。この程度であれば能力を使うまでも無い。

奈々はすぐさま敵の方向を探知にかかる。

しかし、どうやら向こうは気配を消して移動したようであった。敵はどうやら奈々が攻撃をかわしたのと、その発せられる気から素人ではないと判断して攻撃を切り替えるつもりなのだろう。

このビルには以前に素人ではないものが何度か侵入していた。それは名をあげようとする霊能者や、修羅場を潜り抜けてきた命知らずのカメラマンであったりと職種は様々だが、初撃をかわしてきたものは何名かいるらしい。

そういった人間に出会っている為に敵もある程度、学習していたのだ。

「この手の人間は危険だと。」

もし仮にそういった前例が無ければ、この仕事は奈々の能力をもつてすれば楽に終わったであろう。

しかし、慎重になられてしまうと、元々実体の無い存在故に、捕らえにくくなってしまふ。また、霊の集合体というのは他の霊を利用したり、自ら分離することも容易であるために、霊気が分散し、肝心なところで逃げられてしまったり、本体を判別しづらくなってしまうなど、とても厄介な存在になってしまうのだ。

「とりあえず逃がさないようにする必要があるわね。」

まだ敵は奈々の力を過小評価しているのか、それとも様子を見ているのか。分離して多面攻撃をかける気は無いらしく、大きな気ははっきりと奈々には感じとれていた。

それは敵にとって大きな失策であった。

「屋上まで覆っておけばいいかしらね。」

奈々はそういうと気を集中させる。

どこからともなく水の雫が沸きでて奈々の周りを浮遊し始める。

「封水陣!!」

その声と同時に手を広げる奈々。
水が辺りを包み込む。

「さあこれで逃げられないわよ。」

そういつと上を見上げる奈々。

封水陣を使ったことでの目に見える変化は無い。

だが実際には、奈々のいる階から屋上までが、水の力による境界が築かれていた。

これにより霊的な存在はここから逃げ出すことは出来ない。あくまで奈々の能力を上回る能力を持っていない限りは、だが。

敵もそれに気付いたらしく、脱出を試みるがどうやら敵の力程度では全く出ることがかなわない様子である。

脱出が不可能となった今、敵は隠れる事に専念し始める。完全に気配を消し、いずこかへと消えようとした。

しかしそれも奈々にとっては無駄な行為とされてしまう。封水陣の利点は結界であると同時に、探索網の役割も持つ。相手が境界壁に触れずともその内側には発動者の気が満たされているので、どこにいるのかは手にとるようになるのである。

「無駄よ。」

すぐに気配を感じ取って階段を駆け上る。
場所は最上階。

「ありきたりすぎるわね…。」

畏の可能性もあったが、敵に逃げ場が無い以上、誘いに乗るしかない。

途中で雑霊の邪魔もあったが、ものともせず突き進む。

「往生際が悪いのね。」

元はこの世に未練をもって縛られた靈魂なのだからその時点で往生際が悪いのだが、この霊の本体はそれを上回るのである。

悪あがきも往生際の悪さも極めつけだった。

その証拠に最後の部屋の扉は硬く閉ざされていた。

「靈的に縛り付けている上に、物的にもバリケードを敷いてるわね…。」

軽く力をいれてそれを確認した奈々は後ろへ一歩下がる。

「甘く見ないで欲しいわ。この程度で…」

そういつて気を込める。

「水牙!!」

ブシャアアア!!

水流が牙となって扉に飛び掛る。

ズドオオオン!!

水の牙はあっさり扉とバリケードもろとも貫き、破壊する。

「グオオオオオツ!!」

時間稼ぎにすらならなかったバリケードをみて悪霊は声をあげる。

「貴方は既にこの世にもあの世にも行き場所は無いわ。ここで私が滅してあげる。覚悟なさい。」

その言葉に反応したのか悪霊がありつたけの家具やら道具を奈々めがけて投げってくる。

「水閃!!」

その言葉とともに奈々は手刀を振り下ろす。

シュパ!!

その手刀が振るわれた直線状のモノが綺麗に左右に分かれた。

そして分かれた破片は奈々の両脇に音を立てて落ちる。

力の差は歴然だった。

相手もつと霊的な干渉力をもっていればもう少し食い下がれたかもしれない。

しかし物的なものに対してしか力を持たない相手は、奈々の超絶的な能力の前では足元も及ばなかった。

「グガアアア!!」

既に投げるものもなく、人間に直接手を下せるほどの力をもたない悪霊はただもがくだけだ。

必死に脱出を試みるも、結界に阻まれ、自らの体を傷つけ消耗するだけだった。

「哀れね…。でもこれで最後よ…。消えなさい!!」

悪霊に向かって走り出す奈々。

悪霊はこちらにすらめもくれず脱出を試みている。

「我、水の理、水の力を持って彼の者を永遠の安らぎへと葬らん。
永滅水掌！！」

奈々の手に水が螺旋のようにまとわりつく。

そして溜め込んだ気と共に悪霊に対して手を突き込む。

バシユ！！

「グガアアアア！！」

永滅水掌は、その名の通り、永遠に対象を消滅させる。

封印や昇天ではない。存在そのものを消し去る。

勿論、昇天させる目的の技もあるのだが、それは自らの成仏しよ
うという気持ちの薄いものに対して効果が極めて薄い。

従ってこうした未練を残す悪霊は消滅させる以外に道がないので
ある。

「はあ…これで終わりね…。」

消えていく悪霊を見つめながらそうつぶやく奈々。

その時、消え行く悪霊が最後の力で叫んだ。

「ガアアア、イヤダ、マダマダキエタクナイ…。アイツラヲ…妻
ヲ奪ツタアイツラヲ…奈落ニ落トスマデハ…。」

「その為に、他人を巻き込んでいいはずはないわ。」

悪霊の言葉に反論を返す奈々。

「ダカラトイツテ滅ボシテイイ道理ガアルワケガナイ……！！沢山ノ罪ノ無イ命ヲ奪ツタヤツラ八人間トシテ刑ヲ受ケ、今モイキテイルトイウノニ……何故俺達ダケガ滅ビルノダ……。タダ、タダ仇ヲ討チタイダケナノニ……。」

「人には人の法があるわ。確かに彼らは悪い事をしたのかもしれない。だけど人は法によって裁かれるものよ。貴方に裁かれるものではないわ。」

「デハ……私ノ妻ヤ子供ノ命ハドウナルンダ！！復讐ノ為ニ折角力ヲ貸シテクレタトイウノニ……。」

「なんですって！？復讐の為に……自らの愛する人を取り込んだというのっ！？」

奈々は悪霊の言葉に驚きを隠せず、つい声を張り上げてしまう。

「ソウダ……喜ンデクレタヨ……、ダガソレモ無駄ニナツテシマッタ……。才前ハソノ悲シミをワカルノカ！？」

「わかるはずないわー！！」

「何モ……何モ考エズニ……ソウヤツテ……命ヲ奪ウノカ……貴様モアイツラト一緒ダ……。セ……メテ……家族ダ……ケハ……天国へ送……ッテ欲シ……カッ………タ……。」

その言葉を最後に悪霊は消滅した。

悪霊の消滅と共に封水陣も消える。

使命を果たした奈々だったがその心にはやりきれないものが残った。

消滅させた後、今もまだ悪霊が消えた場所から動けずにいた。

「私は正しいはずよ……。お父様もそうしてきた……。彼らはしては

いけないことをしたのよ…。消えて当然なのよ…」

何度もつぶやき、自分を納得させようとする。

そこへ、翼が上がってきた。

悪霊を退治したことは外からでも確認出来たが、仕事が終わったにも関わらず、奈々がなかなか降りてこないので心配になって様子を見にきたのである。

「どうした奈々？」

やさしく問い掛ける翼。

「お父様！！私は…私は正しかったのでしょうか！！彼らは…彼らは…悪いことをしました。しかし…」

目に涙を浮かべながら話す奈々。

根が優しく、あまり人間の暗い部分に触れてこなかった奈々には悪霊の言葉は堪えたのだろう。

自らに納得をつける答えが必要な状態であった。

「奈々、彼らはもう既に人ではない。人でないものを人の法で裁くことは出来ない。そして、彼らは一度悪霊に身を落とせば、いかなる事をしようと昇天することは出来ない。あるのはただ消滅のみだ。悪霊とは力を持つ代わりに、現世に留まる間、その身に多大なる苦痛をもたらす。それを和らげるには人を殺し、その魂を飲み込むほか無い。つまり、悪霊は目的を果たした後、昇天することも出ず、結局、苦痛から逃げようと人を殺めるのだ。奈々は正しいのだ。悪いのはその身を悪霊に落とした彼ら自身だ。無論、そうなった経緯には同情する部分もある。だが…これは…、その結果の報いなのだから…」

そう諭す翼。

しかし奈々は泣き止まない。

「それはわかっています。でもでも……!!」

「奈々、退魔とは悲しみを背負うことだ。悪霊が起こす事件に対してもそうだが、彼らそのものの悲しみや罪も背負わねばならない。奈々が退魔を悲しいこと、と感じるのであれば私は何も教えることはない。ただ消滅してしまった彼らの事を忘れるな。自業自得とはいえ、悲しい存在なのだから。我々が彼らの存在と悲しみを背負って生きること、彼らを生かすつづけなければならぬ。それが退魔を行ったものの宿命だ。彼らは消滅しても私達の中で生き続ける。詭弁かもしれないが、これもひとつの弔いなのだ。だから悲しむな、とは言わぬ。その気持ちだけは永遠に忘れるな。」

そういつて翼はまだ泣きじゃくる奈々を抱きしめた。

「は……はい、父上……。」

真っ赤に腫らせた目を拭いながら、奈々は泣くのを止めた。

これからはこのような悲しい事件が奈々を待っているのだから。

「今日はよくやった。しばらく仕事はない。ゆっくりと休むがいい。」

翼はそういつと、ゆっくりと歩き始める。

しばらくしてから奈々もそれに続く。

退魔という道を歩み始めた者のスタートだった。

それは奈々にとって辛く悲しい物語の始まりでもある。いつ終わるともしれない戦い。人に争いと悲しみがある限り、きっと終わることはないだろう。しかし奈々はその道を選んだ。全ての悲しみを背負って、自らが十字架となるべき道を。

「私、絶対に救ってみせます。」

それは誰に言ったでもない奈々の独り言だった。

その独り言が聞こえていた翼も特に返事はしない。

救うのは他の誰でもない悪霊達だ。

消滅しか待っていない存在。

悲しみと苦痛を背負いつづける哀れな存在。

いかなる方法をもつてしてもその魂は報われることはない。

しかしそれでも奈々は彼らを救うと言った。

それがどれほど険しく困難な道であることが。

いや、不可能な話であることが。

翼はその道の険しさを身をもつて知っているからこそ返答しなかった。

だが我が子に対する期待か、それとも長年の勘か、奈々なら出来る、そう思っていた。

奈々ならその道を諦めることなく進んでいけるだろうと。

過剰な期待であることはわかっていた。

優しさと強さを秘めた奈々は今までの竜堂家の人間とは少し違う。

彼女には何か、いいようのない他の何かが秘められている。

その答えが出るのはまだまだ当分先の話であろう。

そう考えながら翼はそつと奈々の頭を撫でた。

奈々も黙って微笑んだ。

- どうかこの娘の行く末に、救いがある事を… -

翼はそう願うと自然と足を速めた。

立ち止まってはいけない。

歩みを緩めてもいけない。

この道はただ迷いなくまっすぐに進んでいく、それだけの悲しい道なのだから…。

03 悲しみを背負うという事（後書き）

誤字・脱字等ありましたら、ご指摘いただければ幸いです。

またお時間やお手間などがございましたら、ご感想などをいただくと私が喜びます。

04 奈々、浮かれる（前書き）

本作品はフィクションです。

登場する人物・団体・国家・企業・名称・宗教などは全て架空の設定であり、現実との関係はございません。

04 奈々、浮かれる

その日は朝から清しい晴天に恵まれていた。寒くもなく、暑くもない穏やかな気候。

これから冬を迎えようというのに鳥の囀りさえも、まるで春が来たのを祝福するかのようによろこばかで澄んでいた。

昨晚の退魔から明けて、その天気とは裏腹に奈々の心はまだ多少曇っていた。

いつものように行水や鍛錬を行いながらも、心は退魔について考えずにはいらなかった。

しかし一朝一夕で答えが出るものでもなかった。

「やっぱり父上の言う通りなのよね…」

十字架を背負う。

そして彼らを忘れない。

それが奈々に出来る唯一の義務であり、甲いなのだ。

そこまで考えて、一度木刀を迷いを払うかのように振るう。ヒュン、と澄んだ音がした。

「よし。」

そういうとシャワーを浴びて、学校の制服に着替える。

朝食にいつものように出てきた奈々をみて、翼は「ふむ」と一言言っただけで黙っていた。

翼にも奈々の迷いがすぐ晴れるものとは思っていなかった。

しかし、当面の迷いは自ら晴らした様子が奈々から感じ取れてはいたので、あまり何かいうと決断を迷わせる選択肢を増やしてしまうような気がしてならなかったので口を閉ざしたのだ。

代わりに翼の口から出た言葉はこんな内容だった。

「奈々、門限は22時だ。遅れるな。」

「わかりました。」

と、冷静に返したものの、その言葉で奈々は大事な事を思い出した。

退魔という大きな使命を負ってしまったものの、その代わりといっってはなんだが、ある程度の自由を手に入れたのである。

実はちやつかりある程度の資金は退魔に行く前に財布に入れてある辺り、かなり期待していた。

何せ一般の女子高生というのは普段何をするものなのかがわからないのである。

奈々にとっては興味深々のところである。

今まで退魔の事で頭が一杯だったのが、既に今日の放課後の事で頭一杯になる奈々。

その様子を翼はヤレヤレといった様子で見つめていた。

とはいっても奈々はまだ16歳の少女なのだ。

浮かれ気分も仕方あるまいと、気付かれないように小さく笑ってみた。

そもそも奈々は今まで学校と自宅との往復、そして修行の毎日しか経験していない。

たまに必要があつて外出にお供したり、買い物をするこもあつたが寄り道は言語道断だったし、目的以外のものに対して質問も許

されてこなかったのである。インターネットなどの電子環境も家にはなく、情報はテレビと前時代的な紙の新聞だけであったのだ。

そこへきて、門限があるとはいっても放課後から22時までの自由時間が唐突に与えられたのだ。

重い使命と責任を負ったとはいえ、初めての生活、そしてこれから変わる世界を考えれば奈々ではなくても浮かれるのは仕方のないことである。

「強盗などは物の数ではないが、それでも世間は物騒だ。気をつけるのだぞ。」

実際、竜堂家に何度か金銭目当ての強盗などが押し入った事がある。

丁度、組員が留守の時を狙った犯行だった。

その時、家には何人かの使用人と当時10歳の奈々と翼しかいなかったが、あつけないほどあっさり5人の強盗を撃退した。

そのうち二人は奈々が倒したものだ。

護身術から本格的な格闘まで、既にマスターの域にあるといつていい奈々である。更に水の能力もある。

強盗どころか正規の兵隊でも物の数ではない。

それでもあえて気をつける、というのは実は翼の娘を可愛いと思うあまりの失言ではある。

「わかっています。それでは、行って参ります。」

奈々もそれはわかっていたが、いつものように挨拶して家を出た。心なしか足取りは軽やかだった。

「お嬢様、ずいぶんと嬉しそうですね。」

それを見ていた使用人の一人が翼にそうつぶやいた。

「ハメを外しすぎなければいいがな…。」

厳格な父を演じようとする翼に、使用人はクスクスと笑う。

「心配しなくても旦那様のお嬢様です、大丈夫ですよ。」

そういうと足早に食器の片付けに向かってしまった。

「そんなに心配しているようにみえるのか…。」

もう少し厳しくした方がいいのか？そんな事を考えながら翼も居間に戻ったのであった。

家を出て学校に向かう。

もう何年も繰り返してきて見慣れた景色ばかりが続くはずだが、今日はなんだか鮮やかに見えた、と思うのは奈々の錯覚ではあったが、今の奈々にはとても新鮮に映っていた。

16年生きてきて、全く新しい事を体感する機会というのはそういうものではない。

ましてスカイダイビングのように思い切りが必要なものでも、たまにやるようなものでもなかった。

そう、彼女の日常すべてが新しくなったのだ。

退魔の件が少し気を重くするものの、それも新しい日常だ。

好奇心旺盛な奈々のお年頃では胸がはずんでしまうのもムリはない話だ。

誰にも聴こえないような音量で鼻歌を歌いながら学校へ向かう。見た目にはいつも通りだ。

「おはよう、奈々。」

聞き覚えのある声が挨拶してきた。
が、その声の主はこのような時間に聞こえてくるはずもないので、
一瞬誰だかわからなかった。

「あら、セフィー！珍しいわね。明日は雨かしら？」

「私は、たまたま早起しただけだよ。まあそれも珍しいんだけどね。」

と、苦笑いを浮かべながら言うセフィ。

「でも、それ以上に、私は奈々が上機嫌なのが気になるところなんだけど？」

意地の悪い笑みを浮かべながら奈々を見るセフィ。どうやらすっかりお見通しのようだった。

「なんでもお見通しね。ね？セフィ。今日、放課後空いてるかしら？」

「ん？何か買い物でも頼まれたの？」

そもそも奈々が買い物に出るといふ事は殆どない。使用人がすべてそれを済ましてしまうからだ。

それでも稀に、奈々に買い物頼む時がある。

それ故、セフィにはたまの買い物がとても嬉しいのかと思っていた。

「ううん、まあ買い物してもいいのだけれども……。実はね……。」

と、セフィに修行の解禁が出された事を告げた。

「おお〜。やったね、奈々！これで若者らしく青春を謳歌できるじゃないっ！！」

自分の事のように大げさに喜び、驚くセフィ。いきなり奈々の手をとって踊りだす始末だ。

他の登校生徒達も何が起こったのかとまじまじと見つめていた。

「や、やめてよ、セフィ。恥かしいわよ。」

顔を真っ赤にしてそういう奈々だが、顔は嬉しそうだった。

「アハハハハ。まあおめでたいじゃないの！じゃあ今日は思いっきり遊ぼう。私が色々連れまわしてあげる。」

につこり笑うセフィにちょっと嫌な予感を覚える奈々。

「え、えと…。お手柔らかにね？」

「任せておいて！」

ドンと自分の胸を叩くセフィ。

余り大船に乗った気分になれないのはセフィだからなのだろうか？と真剣に考えてしまう奈々だった。

昼休み。

昼食を取りながらセフィとどこへ遊びに行くかの協議だ。

「カラオケ…っていつでも奈々、最近の歌…っていうかポップス

とかしらないよね?」

「うん…最近のはまったく…。演歌なら父様のを聞いてるからわかるんだけど…。」

幼い頃から古き時代の曲ばかりや三味線や琴などの旧日本音楽ばかり聞いているので最近の曲についてはさっぱり理解がない奈々である。たまにテレビなどで若い男の子が5人組くらいで歌っているのを見たり聴いたりはその歌の良さがわからない。むしろ演歌などに情緒を感じてしまうババ臭い女子高生なのだ。

「今時のじょしこせゝが演歌はないわよねえ…。」
呆れたように呟くセフィ。

「時間があったらそういうのは聞いてみるわ。」

「まあ、それはおいおい貸すなりするとして…。お金は大丈夫なんだっけ?」

今まで奈々が遊ぶことにお金を使ったことがない、というのは理解している。

遊ぶのにお金がある、という知識くらいはさすがに持っているだろうが、奈々は稀に天然級の大ボケを口にすることもあるので念の為聞いておくセフィ。

「うん、といってもいくらくらいつかうものなの?」

先程も言ったように、基本的にお金をあまり使わない奈々は金銭感覚というものが無い。

学食は使わずにお弁当派だし、通学は徒歩、たまに行う買い物は金額はぼびったり渡される上に、まとまった量の生活品や医療品などの買い物になる為、あまり参考にはならない。

「お嬢様学校、といつても私らみたいな庶民派は、一日の遊びに使う金額なんて大したものじゃないわよ？」

この学校では生徒達の間で「庶民派」と「お嬢派」に分かれている。

庶民派は主に質素な服装を好み、遊びも趣味もごく一般的なものが多い。

それでも家は学校が学校なだけにかかなりの富豪だったりするのだが。

主に親の会社が超一流企業からみて下っ端企業だとか、お金持ちなのに貧乏性だったり、考え方が庶民的な人間に「庶民派」の称号が与えられる。つまり「お嬢派」から見たときの格付にしかすぎない。

奈々やセフィは資産や規模を考えれば超一流の上、ではあるが逆にそのせいで庶民派扱いである。

彼女らがそれなりの態度をとれば一気にお嬢派のトップにも立てるであろうが、興味がまったくないのでそういった事態にもならない。まして二人とも校内では変わり者、で通っているので今更「お嬢派」には縁組されないであろう。

お嬢派はその名の通りお嬢様な人間を地でいく人々である。お嬢派の人間達にはその称号は却下されているものの、庶民派からはそう呼ばれている。

庶民派からしてみれば『お高くとまっちゃって』と侮蔑の意味をもってお嬢派という称号なのである。

下位企業でもお嬢派の人間はいるが、大抵大企業の娘の腰ぎんちやくになっっている。必死でお嬢派に居残ろうと必死な「お嬢派底辺

組」とも呼ばれているが。

お嬢派はまず見栄えから違う。

特注の制服や校内にSPをいれたりなどとやる事が派手だ。

漫画のようだが赤い絨毯を校門までひいて登校するようなものもある。

へりで校庭に乗りつけたり、フランス料理のフルコースを昼食に食べたりと、漫画もびっくりの展開が日常のように行われている。

従って買い物も噂を聞く限りではとんでもない。

貸切、買占めは基本とでもいうようなゴージャス振り。そのお零れを貰うためにお嬢派に居残ろうとする人間だっているのだから。

「まあそうね、買い物して調子のつても1万がいいところかしらね。」

「えっ!?!?」

一万円、という言葉に驚きの声をあげる奈々。

逆にその反応に驚くセフィ。

「え!?!?ってえ!?!?アンタいくらもってきたの。ちょっとお姉さんに耳打ちして御覧なさい。」

一応回りの耳を考慮しての配慮だ。

「えっと…10万…。」

「アンタねえ…実はプチお嬢派?」

と、ニヤリと笑うセフィ。

「え〜だつてだつて…。テレビで最近の女子高生はお金使いが荒いって聞いたから…。一応気を使って、色々考えた結果、そのくらいあればなんとかなるかな〜って…。」

おどおどしながら話す奈々。

「アーハッハッハッハッハ！アンタ、真に受けすぎよ。アハハハハハ。」

あまりに馬鹿声で笑うものだから教室の皆が注目していた。

「ちょ、ちょっとセフィ。」

「イーッヒッヒッ。ごめんごめん。素直すぎよ、奈々は。まあそれだけお金あるならちょっと洋服でも新調しちゃう？か〜わいいの。」

そこまでいって何を想像したのかまた笑い出すセフィ。

「セフィ？何がおかしいのよ。」

何を想像されているのかとても気になって仕方がない奈々。

「だつてさ〜。いつもキリッとしてる奈々がフリフリのお洋服とか…フランス人形みたいな…プツ、アハハハハ」

腹を抱えて笑い転げるセフィ。

奈々もちよつと想像してみる。見たことあるフランス人形の顔に自分の顔をあてる。

「私はそんなの着ないわよっ！！」

想像してから反論の声をあげる奈々。

そんなフリルの一杯ついた所謂ゴスロリ衣装が似合うとは到底思えない。

だが、和人形の着物や衣装ならどうか？と考えた結果、意外と悪くないかも？と思っていたことは口に出さない。

「あははっ、そうだよねえ」。冗談冗談。ま、適当に町にくりだしてから考えよ。どうせあんまり行つた事ないでしょ？」

笑いを抑えつつ、結局今日の方針も投げやり気味に決めるセフィ。昔から彼女との決め事で最初から明確に方針が決まったことはなかった。

奈々は最初、そうしたあやふやな状態を作つたままにしておくことに大きな不満を覚えたが、セフィと何度か行動しているうちにそうした状況であつても、彼女は彼女なりのプランを事前にもつていて、それを自然に誘導してくれていることに気が付いたのである。何が起ころかわからないほうが楽しいでしょ？とはセフィの言である。

「そうね。見るだけでも今日のところは楽しそうだし。」

そう、楽しみは今日だけじゃない。これからずっと続いていく。焦る気持ちを抑えて奈々は落ち着こうとする。

「今日だけって訳じゃないしね。奈々が飽きるまで付き合っただけ。」

「ありがと、セフィ。」

ニツコリ笑い合う、奈々とセフィ。

周りからみたら真剣に話しているかと思えば馬鹿笑いをしたり、微笑んで笑いあったりと危ない関係にみえなくもなかった。二人とも周囲を気にしていないので変わり者呼ばれるのも納得できる。

と、そこへ声が掛かる。

「奈々さん。」

「はい？」

声に奈々が振り向くとそこには見知ったクラスメイトの一人が居た。

「えっと…サンデイさん、どうしました？」

サンデイ・リトウラ。

クラスのクラス委員などをやっている生徒だ。

庶民派に分類されている彼女だが、お嬢派からのウケは悪くない。ちよつと雑用係程度に扱われている節もあるが…。

明るく、分け隔てのない態度とそれなりに優秀な部類に入る成績で教師にもウケもよく、概ね順調で快適な学生生活を営んでいるようだった。

奈々やセフィとは余り仲は良くない。というか、仲良くなる切欠が無かった。

奈々はいつも早く帰ってしまうし、セフィも奈々以外とはあまり関わらなかつたからだ。

「その…ちよつと話きいちゃったんですけど。その…放課後に遊びに行くの？」

おどおどと探るように話し始めるサンディ。

奈々はその態度を若干、訝しげに思ったものの、今まで特に会話しにくい会話をしたこともなかったし、そもそも変わり者に分類される自分とセフィを相手に話しかけてくるのだから仕方ないことかと割り切って考えた。

「ええ、初めてのことでセフィに色々教えてもらおうかと思って

」

浮かれ顔で話す奈々。

「16歳で初めて遊ぶなんて信じられないよね。」

と軽く笑いながらセフィが言う。

セフィもクラスでは奈々以外に深い交友関係をもっていないからサンディが会話に入ってきたことを少々不思議に感じつつも、この場の明るい雰囲気と奈々の気分を損ねることはしたくなかったので、明るく相槌を入れた。

「アハハハ。その…確かに珍しいね。でね…えっと…私も一緒に話していいかな？」

サンディのその言葉に一瞬、セフィと目が合う奈々。

どうしよう？と奈々訴えかけているのをセフィは瞬時に理解する。

サンディとは高等部からの知り合いになり、今まで接点らしき接点もなかった。

たまたま遊びにいく話が聞こえたからといって、今まで親しくもなく、また親しくしたいというような接触も取ってこなかった相手が、急に一緒に話したいと言い出せばあらぬ疑いだってかけたくなる

ものだ。

「またどうして？」

奈々に代わってセフィが疑問を投げかける。

「その…前々からお話したいと思ってたんだけど…奈々さん、いつも忙しそうだったし…。セフィさんも奈々さんとしか喋らないから…。これを機会にと思って。私もそんなに友達多くないし…お嬢派…っていうと怒られちゃうけど、あつちの方の人たちにはどうにも着いていけないし…。そ、それに二人よりも三人の方が楽しい！…!と思うんだけど…その…どうかな？」

途中しどろもどろな感じになりながらも、そういつて最後は明るく笑うサンディ。

「という事だけど奈々、どうする？」

その言葉がセフィはどっちでもいいよ、という答えということがわかった。

実際、セフィは人付き合いが少ないにも関わらず、校内の人間関係の情報は豊富に持っている。

そのセフィがどっちでもいい、という判断を下したということは、この提案に害や背後関係がないことを示す。

あとの問題は奈々が心情的に他者を入れるかどうか、という部分だけのようであった。

「そうね、じゃあ一緒にしましょ。」

奈々も今までは環境が積極的に友達を作らせなかっただけであって、機会があるのならば友達は多く持ちたい、そう考えていた。

信頼できる友人はセフィだけでもいいのだが、楽しみは共有できる友達というのは多いに越したことはない。

「ホントに！？やった！！それじゃ…時間もないし、また詳しい事は放課後にね。」

「ええ。よろしくね」

奈々の同意の返答に大きく喜びながら、軽くステップするような歩調で自分の席に戻っていくサンディ。

「私はあの子、嫌いじゃないからいいけど。良かったの？」

サンディが戻ったのを見届けてから、小さく話すセフィ。

「私も出来れば多くの子と仲良くなりたいたいし…。サンディさんい人そうだし。」

修行の成果なのか、本人の生まれ持った資質なのか。

本質的に人を見抜くという目について奈々はかなり優れている。

よほど自分を偽ることに長けた人間や、騙すことに生きがいを感じるような巧者でもない限り、奈々の『いい人そう』という発言には信用を置いても良いと判断できるものであることをセフィは知っていた。

「そうだね。じゃ。今日は3人で思いっきり羽伸ばしましょ。」

と、背中を伸ばしながら結論をつけるセフィ。

そうこうしているうちに予鈴が鳴り響いた。

技術はいくら進歩しても予鈴はかわらない。

「さ、残りの授業を片付けましょ。」

と、奈々が放課後にむけて気合を入れる。

「私はもう今から遊びに行くくらいだけどね。」

だるそうに答えるセフィに奈々は笑顔で答えたのだった。

放課後、その時間までは長かった。

実際には今日の授業は普段より一時間少なかったのだが、今の奈々には1分・1秒がとても長く感じられた。

傍目には冷静そのもの、普段通りを演じているものの、心の中はウキウキワクワクで一杯だ。

現に今、受けている今日最後の授業など頭に全く入っていないかった。むしろ、今、何の授業を受けているのかすらわからないような状態だ。一応ノートには黒板の通り書き写してはいるものの、ほぼ自動書記状態である。

教師の手が黒板から離れ、話の時間になるともう目は時計に向けている。流れていく秒針をただジーンと眺める。

ジーンと眺めるといつても、あくまで黒板や先生をみてるフリをしつつである。視線をあまり外さないように目の端でジーンと見つめているのである。

奈々の修行には護身術等の他にも尾行術などの、いわゆる探偵のような、ものも含まれている。

これは悪霊等の敵が人間、その他生物にとりついたなどした場合

に、確実に後を追う事を想定しての事である。

大抵は一度その靈気を捉えてしまえば、その後を追うだけで済むのだが、稀にその靈気を偶然、または作為的に攪乱、消去してしまう場合がある。偶然とは都会の生み出す電波等の歪み、土地の靈的作用など。作為的とは意識をもち、更に靈力の強いモノは靈気を隠したり、また常に微弱にその靈気を拡散させる事で搜索を困難にする場合があるのだ。

従ってこういった探偵術、というのも疎かにできないのである。

-あと5分-

カツカツと黒板に文字を書くチョークの音だけが響く。

今時、黒板にチョークなど前時代的なものをつかっているのはリテール広し、といえどもここくらいなものだ。

実際に教師からは電子掲示板に変えてくれ、という要望もでている。これはただ単に書くのが面倒だからだ。

-あと3分-

決して表にはその態度や心境を表しはしないが、奈々は今、これほど無いまでに焦っていた。

自動初期状態を続けながらも、心は既に校外へと飛び出している。

-あと1分!!!-

秒針があと一周、と思うと嬉しくて胸が張り裂けそうだった。しかしその一周もまた長い。

普段、修行で2〜3時間平気で瞑想出来るはずだが、これほど1秒が長いと思つた事もない。

キーンコーン　カーンコーン

終業のベルがなる。

「よし、今日はこれまで。」

その声と同時に心の中でガッツポーズする奈々。

ふと、視線を感じて横を見ると、セフィがニヤニヤしながらこちらを見つめていた。

「お疲れ様、奈々。見てて、授業より楽しかったわ。」

と、意地悪く言った。

恐らく奈々の変化に気付けるのはセフィくらいなものだろう。付き合いが長い、というのもあるがセフィの観察眼も人並み以上のものがある。

「うう…ずっと見てたのね…。」

少し赤面する奈々。竜堂の跡取娘がこんな事で浮かれていたなど、竜堂家の縁の人間にしれたらそれこそ笑いものだった。

「ま、他には誰も気付かなかったでしょうけどね。でも私にずっと見られてたのを気付かない程、っていうのはちよ〜っとまずいんじゃない？」

「た、確かにね…。でもしょうがないじゃない。今日くらい。」

苦笑しながら奈々が答える。

「あ、開き直ったな。今後気をつけなさいよ。」
「そうするわ。ご忠告ありがと。で、そんなことより……。」

問答している場合じゃない、と奈々が急かす。

「はいはい。わかってますよ。お嬢様お待ちかねの時間ですからね。」

「もおセフィったら。」
セフィのからかいがしつこいのでむくれてみせる奈々。

「アハハハ。っと、サンデイさんも帰り支度終わったみたいだね。」

丁度、サンデイが手荷物をまとめこちらに向かってきていた。

「おまたせしました。お二人とご一緒出来るなんて楽しみです。」
と、にかやかに笑うサンデイ。

「私も楽しみです。」
そう笑って返す奈々。

「ものすごくが抜けてるわよ。アハハハ。」
「ちよつとセフィ、いい加減しつこいわよ。」
「アハハハ。ごめんごめん。」

からかうセフィにいい加減ちよつと腹を立てる奈々だった。

「それじゃ、いきましようかね。楽しい放課後をエンジョイしましょ。」

セフィが席から立ち上がる。

「そうね。楽しく思いつきりね。」
奈々もそういって席を立つ。

これから奈々の新しい日常の幕開けだ。

それが楽しみに満ちているのか、悲しみに満ちているのか。
それはわからない。

ただ、奈々には希望に満ちた日々の始まりとしか、今はまだ思えないのだった。

例え、退魔がどれほど悲しく険しいものでも、この今の楽しいひと時が得られるのなら、それも乗り越えていける。

そう思っていたのだった。

04 奈々、浮かれる（後書き）

誤字・脱字等ありましたら、ご指摘いただければ幸いです。
またお時間やお手間などがございましたら、ご感想や評価などを
いただければ、今後の参考にして改善していきたいと思えます。

05 初めての喫茶店と携帯（前書き）

本作品はフィクションです。

登場する人物・団体・国家・企業・名称・宗教などは全て架空の設定であり、現実との関係はございません。

05 初めての喫茶店と携帯

「見てまわる、って言ったけど奈々は何かこれだけは今日見ておきたい、知っておきたいってモノやところはないの？」

町へ向かうバスの中でセフィは思いついたように質問した。

その質問を受けて奈々はしばらく考え込んでいたが、

「私、携帯が欲しい」

と簡潔、真剣に答える。

奈々の真剣な答えを聞いて、「今時、携帯も持っていないのか」と、セフィとサンディは笑いあった。

携帯と一言でいっても旧時代の電話機能を中心とした携帯端末ではなく、現在は持ち運べるパソコンといえるものであった。むしろ電話機能はおまけであると言えるほどコミュニケーションツールが発達し、最新最高のものともなれば思考するだけでメール文章を作ったり、ネットから必要な情報を取得してくる、地図をナビゲーションしてくれるなどの便利機能が満載している。加えて、世界ではもうこれを持つ事が常識化していることもあって、身分証明書に利用できたり、選挙や役所関連の申請なども行えるようになっており、基本的に小学部を終えた人間は誰でも持っているのが当たり前という認識とされている。無論、奈々のような例外や、スラム街の住人などは持っていないということもあるのだが。

奈々が携帯が欲しいという理由については、家にそういったネットを利用するものが全くない、ということもある。正確には存在はするのだが、奈々が利用できる範疇にはないのである。

竜堂家には一台だけ、当主専用の端末というものが存在する。その端末に連動する専用携帯も存在する。それらは退魔以外にも竜堂

組に関連する情報や、財界や政界との連絡や報告、現在当主である翼の個人的交友による連絡や雑談内容なども含まれており、退魔だけの情報は奈々が共有する権利を得たが、かといって当主としての権限は譲渡されていないため、結局は家で情報端末を使えないことになる。

特に退魔に関して、最近は大きな仕事や難易度が高い仕事がないということから、事前情報だけで事が足りてはいるが、場合によっては随時情報が更新されるケースや、要人に憑依された場合の関係部署との連絡などを考えると、現地でやりとりが出来る携帯端末を持つことは必須条件ともいえる。

これだけでも携帯を持たなければならない理由としては充分ではあるのだが、それに加えて奈々が個人的に「今時の女子高生たるもの、携帯を使いこなしてこそ真の女子高生と言えるのでは？」と考えていることもある。また、他人の携帯についているストラップなどを見て、なんとなくいいな、と感じてしまっていることもある。

要するに奈々は、とりあえず周りのふつーの女の子と形だけでも同じ格好を試してみたいのである。

「携帯といってもどんなのを買いますか？開発している会社もいくつかあって、機種や機能が様々ありますよ？」

奈々が携帯を初めて買うということから、恐らくはそういった知識もないのだろう、と踏んだサンディは基本的なことを質問する。

「そうだね、私は使い道で決めるのが一番だとは思っけれど、デザインとかも色々あるからね。」

サンディの質問に付け加える形でセフィが後に続く。

「そうなのね…。うん…とりあえず丈夫なものであればいいといえはいんだけど…」

奈々の要求は「退魔に耐えうる強度」ではあるが、多少ぶつける、多少落とす程度のことでは済まない話を想定しての強度であるため、一般品では対応不可能である。その為、一般品の中でも強度が高いとされるものでまずは様子をみたいと考えていた。

もし、それでも簡単に壊れてしまうようであれば、父の伝手を使わざるを得ない。そしてその場合、デザインなどはとても無骨なものとなり、とても女子高生が持つものとしては相応しくない携帯となることはわかりきっていた。

「じゃ、まずはカタログを奈々に見せつつ、簡単に説明する必要があるねえ。」

「それなら、『アクティオ』でお茶や軽食を取りながらでいかがでしょうか？」

「おっ、結構通なお店を知ってるね、じゃそれでいこうか」

セフィとサンデイがこの後の段取りをサクサクと決めていく。

奈々は全く会話についていけないが、どうあっても初めてのことで事前に知識を集めていても経験の前では対応出来ないことは良く判っていたので、むしろこの二人が自分のために最良の予定を考えてくれることに感謝した。

ほどなくしてバスは、フランベルジュ特区の東側にあるセレーネと呼ばれる町についた。

セレーネはフランベルジュ特区の中では最大のショッピング街となっている。特区内では珍しく、高級品だけではなく、一般品も取り扱う店が多く、ピンからキリまでなんでも買える街といっても過言ではない。

そうした理由からか、老若男女、富豪一般問わず多くの人が訪れるこのセレーネではあるが、若者のファッションや情報の流行の最先端に行く街でもあり、10代から20代までの若者は挙ってここに遊びに来る。

そんな若者に混じって、奈々たちもセレーネに到着したのである。

「さて、まずは『アクティオ』に向かいますかね」

「奈々さん、わからないことがあったらいつでも聞いてくださいね」

「ええ、ありがとうサンディさん」

サンディは簡単にセフィから奈々の特殊な家庭事情を聞いていた。無論、奈々には許可を取り、退魔の部分などは隠してのことであるが。

要するに大事に育てられつつも、組という特殊な事情や、古い名家であることもあって厳格なしきたりなどがあり、今の今まで自由に遊ぶことが出来なかった、という簡単な説明である。

それを聞いたサンディは首を傾げていたが、ある程度自分の中で納得がいったのかしばらくすると笑顔でその旨を了承したのである。恐らくそれでもサンディの中では細々とした疑問や質問はあるのだろうが、この場はとりあえず抑えて以後の関係を向上させていくことで聞けるなら聞いていこうという姿勢をとっていた。

その姿勢をセフィは好意的に受け止め、放課後から移動までの30分程度の時間でかなり態度を緩和させた。といっても元より傍から見れば警戒してるそぶりは見せなかったが、それでも言葉を選んでいるような場面は奈々からは良く見て取れていたのである。現在は、最低限言っただけを警戒している状況で、サンディを含めた三人の交友関係は当面の間、かなり友好的に進むとみて間違いなかった。

しばらく他愛もない話をしながら町を進む。

途中あれこれと奈々が「あれは何？」 「この店は何を売ってるの？」と質問していく。

この町に来なくても、いや何処にでも存在する店であつても知らない奈々に対してサンデイはかなり驚きをみせたが、今まで学校と家の往復くらいしか見てきた世界がないことを聞いて納得した。

「私にはわかりませんですけど…ずっと辛くなかったんですか？」
サンデイは思い切つて奈々にそう切り出した。

聞く分では大事にされてきた箱入り娘とはいえ、玩具や何かを買い与えられるでもなく、舞踊や護身用の体術、礼儀や作法の習得などだけをずっとやらされてきた（サンデイはそう聞いているため）というのは非常に窮屈でつまらない毎日ではなかったのか？とサンデイは考えていた。

「そうね…学校に行つていた以上、他の子の話を聞くにつれて、私がいかに異常な生活をしているか、というのは判ったけれども、かといつて私はそれに反発しても他に道がありませんでしたし…辛いと思つた時期もありましたけど、今はこうして立派に育ててもらいましたし、遅くはありますけど父にもようやく認められて自由も貰えましたから…。そう悪いことでもありませんよ」

時折、過去の辛いと思つた時期を思い出すかのように、顔を空に向けながら奈々は答えた。

「奈々さんつて…凄い聖人君主みたいですね」

サンデイの思いがけない返答にセフィが思わず吹き出す。

「ぶっ、奈々が聖人君主とか…あはははははは」

「ちよ、ちよつとセフィ！聖人君主は確かに私もちよつとそう思われるのはどうかと思うけど…。そんなに笑うこともないじゃないの！」

「いや、だってねえ…」

「あ、あの、奈々さんごめんなさい」

セフィに馬鹿にされている要因になつた発言に謝るサンディ。

「いえ、その…。謝る必要はないんだけどね」

「そうだよ、サンディさん。こんなに面白い例えをしたのに謝る必要はない！」

セフィがビシッと指をサンディに向けながらきつぱりと言い放つ。何のポーズなのかはさっぱりわからないが、とにかく凄い自信をもつて言い切ったことはわかった。

その直後、拳を振り上げて怒る奈々から逃げるように走り出すセフィ。

「ちよつとセフィ！こら、待ちなさい！」

「つと、馬鹿やってる間についたよ、ここだ」

急に立ち止まって振り向いたセフィにぶつかりそうになりながらも、なんとか急ブレーキをかけて立ち止まった奈々。

サンディもやや小走りでそれに追いつく。

喫茶店「アクテイオ」。

知る人ぞ知る名店、とまではいかないが、店内も清潔でお洒落な雰囲気は若い女性に人気があった。

メニューも豊富でコーヒーや紅茶は数多くの種類があり、それに

合わせた軽食やデザートも合わせて用意されている。それに加えて四季ごとに限定メニューや常連だけが知る隠しメニューがあるなど、つつい足を運んで常連になるうとしてしまう誘惑要素も数多い。

これだけの店舗であれば巷で人気爆発、となってもいいものなのだが、値段が高いというデメリットがある。

一般的な喫茶店に比べて値段が3倍〜4倍にはなるのである。お茶を一杯に軽食とデザートまでつけると、一般庶民の成人が一日に使う食費分程度を軽く超える。その分、質はかなり良いし、量もまずまずといったところではあるが、一般家庭では月に一度の贅沢にしないと、懐が火を吹くことになることは明らかであった。

サンデイやセフィがここを利用するのは、単に彼女らの過程が裕福であったからでこそである。彼女たちの懐事情を考えれば毎日までは無理でも一週間のうち3〜4日はきてもなんら問題は無かった。ある意味、既に一般人とは金銭感覚の基準が違うという点では充分に彼女達も「お嬢様」であることの証明ではあったが…。

セフィは店選びに関して奈々の財政も考慮にすべきではあったが、本日の所持金を考えれば多少高い店でも全く問題は無く、また今までの小遣い全ては大事にとっておいてある、と奈々から聞いていたし、今後の小遣いは退魔の報酬の5%が支払われるということを事前に奈々から聞いていた。

退魔のペースは大体今だと月に1〜2回程度。1回の報酬を考えると、奈々個人にサラリーマンの月収半年分くらいのお金が毎月入ることになる。あくまで平均額ではあるが、場合によっては国や研究機関からなどで収入が大きい場合もあることを考えると、年間で見ただけ、いくら富豪であってもただの女子高生が自由に使える金額としては破格の金額を得ることになるのである。

ましてや奈々は贅沢をするということをしなない。遊ぶことを覚え

たとしても大々的にお金をパーツと使うということはないだろう、
というのはセフィには容易に想像することが出来た。セフィ自身も
派手に遊ぶのは苦手だし、無駄にお金を使うことには遠慮したいタ
イプである。サンデイはどうだかはわからなかったが、無駄にお金
を使うことを良しとするタイプではないことは雰囲気や服装で判断
できたし、事前に得ている情報からもその判断を裏付けるだけの根
拠は得ていた。

アクテイオの出費は決して小さいと思える額ではないが、質を考
えれば相応のものであるし、恐らくこの面子では遊びまわるよりお
茶のみで落ち着くことが多くなることが予想されることから、この
店の雰囲気や女性客が多く過ごしやすいということを加味して考え
ると、以後もこの店を拠点にするような感じで動いていくのが良い
とセフィは考えていた。

「さて…喫茶店がなんなのかは…さすがにわかるよね？」

「まあ…さすがにそれくらいはわかるわよ」

店内に入って席に座ってからセフィはからかうように切り出した
が、さすがに喫茶店がどういう店か程度の知識は持っていたらしい。

「今日のオススメはマロンケーキですね。ケーキだから紅茶系が
合うのかな？わからなければ店員さんにお任せして飲み物を選んで
もらっても大丈夫ですよ。少なくとも合わないものは選びませんし。
あ、勿論、飲み物だけでも大丈夫ですけれど？」

メニューを確認するなり、サンデイが奈々にオススメを紹介する。
奈々はしばらく悩んだものの、とりあえずそのオススメのケーキ
と店員にお任せで紅茶を頼むことに決めた。

セフィはチョコレート系のケーキとコーヒーを。サンデイはイチ

ゴのタルトと紅茶をお任せで頼んだ。

頼んだメニューがくるまでにセフィの携帯を使って、携帯種類や簡単な機種ごとの特徴について話をする。

最初は熱心に聞いていた奈々だったが、どうしても聞きなれない専門用語（といっても、一般的には通用する程度の用語ではあったのだが）が判らず、教える方も難航していた。

「いや〜すっかり失念してたよ。そもそも携帯に関する基礎知識がなかったんだ」

「なんとなく概念的に理解しているけれども、実際に詳しく説明といわれると説明しづらいものがありますね」

セフィとサンディはどうしたもののか、と顔を見合わせる。

当の奈々は奈々で、性格上、わからない部分があるまま「そういうものです」で済ませるのは我慢ならない部分があるため、どうしても根掘り葉掘り聞いてしまう。サンディはそこまで深く知識がないことから答えられないし、セフィはかなり細かい部分まで答えられるが、それこそ本気で専門用語のオンパレードにしなくては説明できない部分まで入ってしまう。

そうこうしているうちにケーキと紅茶が届いたので、一旦そちらを優先することにした。

「わあっ！これ美味しい！！」

奈々がケーキを味わいながら感嘆の声をあげる。

ケーキがどんなものかは知っていたが、食べたことは殆どない。

和風を貫く家系と父の趣味もあって洋風の菓子は基本的に家で食べることはない。奈々のおやつは大体煎餅であったし。

「いやあ、こつも喜んでもらえると思われてきた甲斐もあるって
んだねえ」

「奈々さん、子供みたいに目が輝いてますね」

奈々の食べる様子や反応が面白くてじーっとみつめていたセフィ
とサンデイがそういうと、改めて自分の状況を認識した奈々は顔を
赤らめた。

「だって…ほんとに美味しいんですもん」

フォークの端を口に咥えながら上目遣いでモジモジと話す奈々。

「あんた…それ男の前で狙ってやったらモテモテだよ」

「女性から見ても充分可愛いですよ」

そんな二人の台詞に余計に顔を真っ赤にしつつも、ケーキを食べ
る手は止まらない奈々であった。

その様子を微笑ましく眺めながら、セフィとサンデイも本格的に
自分のケーキへと意識を向ける。

二人がケーキを制覇する前にあっさりどとケーキを食べ終わった奈
々であったが、あまりの美味しさに次のケーキをどうしようか悩ん
でいた。そしてその悩みは親友にあっさりどと看破されてしまう。

「奈々、ケーキもう一個ほしいの？」

「えっ、それは…その…」

恥ずかしそうにもじもじする奈々。

その様子を見たセフィは意地悪そうに言葉を続ける。

「別に時間もあるし、もう一個食べてもいいよ？食べた分は自分で払うんだしそこは自由だよ。」

「そう…だよね…？別に間食することにも制限ないし…」

「でも太るけどね！」

「！？」

セフィの台詞で後押しされたと思って決心を固めようとした瞬間、続くセフィの言葉で我に返る奈々。

いくら世間事情に疎い、ケーキが美味しいとはいっても乙女の宿敵「体重」とは誰しも共通であるのである。

毎日の修行は欠かせない奈々にとって、多少の栄養摂取はなんら問題とすることではなかった。しかし、自由時間が出来たことによつて、どうしても修行する絶対的な時間は減ってしまう。当然、その分身体を動かしたりする時間が減っているのだから、普段の食生活に予定外の栄養が入ってくれば、その分は余ることになる。余った栄養分は当然…。

「またの機会の楽しみにしておくわ」

「それが懸命ですね」

苦渋の選択を下した奈々にサンディが苦笑しながら合わせる。

奈々は意地の悪い親友に軽く睨むような視線を向けたが、当の親友はあさつての方向を向いて口笛を吹くという白々しいとぼけ方を披露していた。

そんな仲の良いセフィと奈々をサンディは楽しそうに、そして羨ましそうに眺めていたのだった。

「さて、そろそろ本題に入ろうか？」

ケーキも紅茶も堪能して悪ふざけも区切りがついたところでセフイが仕切り直しとばかりに言った。

そもそもここには携帯の話を奈々にするために来た、というのが当初の大目標である。

「もう細かい説明はいいわ。後々で調べることにするわね。丈夫そうな機種やシリーズってないのかしら？」

奈々が細かい説明を妥協すると発言したことで、セフイとサンデイはほっと胸を撫で下ろす。

「とりあえず、このシリーズは毎回丈夫さとか頑丈っていうのを謳ってるね。実際、強度としては他社製品よりは高いと私も思うよ。まあそれでも所詮は携帯って感じだけどね。」

「そうですね、デザインに拘らなくて新商品が出るたびに買い換える、っていうことをしないのならここが一番奈々さんの要望には沿うでしょうね」

セフイとサンデイはそれぞれに「J・W0100シリーズと表示されたものを指し示す。

「ふ〜ん…元々建設現場や工事現場労働者向けとして出されたものなのね…」

奈々が説明を読んで納得する。

確かにそういうことであれば通常よりは荒い扱いをしても壊れに

くいように設定していることは理解できる。
だが…

「でも…デザインが男性向けすぎるのよね…」

これを男性向け、と表現するかどうかは議論の分かれるところだが、少なくとも女性向けか？と問われれば否と即断できるデザインだ。機能さえあれば形は二の次というようなただの長方形のデザインや、やたらごつごつした岩のようなデザインのものなど、一応デザインの種類としてはそれなりの数が用意されているが、そのどれもが若い女性の心をくすぐるようなものは存在していない。

「まあ機能性重視ですしね」

サンデイが奈々の意見をフォローする。

「所詮、携帯の強度なんてオーダーメイドしない限りタカが知れてるわよ。デザインが諦めきれないなら普通の商品で様子を見るのがいいかもね。どうしても、っていうなら考えが無いわけでもないけど…」

「あら、セフィ。何か他に当てがあるの？」

「そりゃうちは総合商社よ？携帯も扱ってるもの」

「ああセフィのお父様に期待するってことね？」

セフィの実家は大手の総合商社である。携帯も取り扱っていて、最近の激化する安値競争において陣頭に立って最安値を更新し続ける企業である。

無論、安さを追求する造りとは別に高機能・高品質を追求する部門もある。

「研究部門は結構忙しいけど、規格外の商品作るの好きだからね

え。頑丈かつ、それなりのデザインのものと機能を盛り込むって話
はそんなに手間が掛かるものじゃないし、意外と早く出来るんじゃない？」

まるつきり人事のようについてセフィ。

サンディはそれを聞いて苦笑していたが、実はその研究部門にセフィが一枚噛んでいる部分があることを知っている奈々はその発言が信用できるものであることはわかった。

「はあ…そういうことなら最初からそうしておけば良かったかしらね…」

奈々がため息をつきながら言う。

「でも、それだったら奈々さんがどういうデザインが良いとか、使い勝手とかの実演と実際の使い方とかを考えて参考にしてもらったために店頭にいつて商品を見たほうがいいのか？」

「そうだね、どちらにしても奈々がどんなのが好みか知りたいし、もしかしたら現行品で実際にみたら気に入るものもあるかもしれないし、一先ずいつてみようか」

「そうね、その方がいいかもしれないわね」

奈々はセフィとサンディの意見に同意して店を出る準備をする。

それを見たセフィとサンディもそれに続く。

…結局、店で奈々が気に入るものではなく、要所要所でこれがいい、といった奈々の発言からセフィが推測して機能やデザインを盛り込むしかなかった。

05 初めての喫茶店と携帯（後書き）

誤字・脱字等ありましたら、ご指摘いただければ幸いです。
またお時間やお手間などがございましたら、ご感想や評価などをいただければ、今後の参考にして改善していきたいと思えます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0980q/>

竜堂奈々～退魔幽遠記～

2011年3月1日23時14分発行